『プログラマー』1963年12月（教育総合研究所）

プログラム方式の目ざすもの

国立教育研究所　矢　口　　新

●

プログラム学習は何を目ざすのかと聞かれたら、即座に「それは教育の改造です」と答える。すると、「教育の改造はわかるが、どこをどう改造しなければならぬのか、もう少し具体的に」と問われる。

そこで今の教育で一番改めなければならないのは何だろうと考える。しばらく考えていると、実にいろいろなことが浮かんで来る。それに軽重の区別をつけるのはむつかしい。ここでは、それらのうちからいくつかをあげて考えてみよう。

●

まず第一に、先生の考え方をかえることが出来たらと思う。先生の考え方がかわれば教育がかわるだろうというのではない。むしろ逆に教育の形をかえて先生の考え方をかえたいと思うのである。妙な理論と思われるかも知れないが、まあもう少し読んでいただこう。

先生の考え方といっても何のことかわからないと思うが、ここでは先生の生徒に対する見方のことを言っているのである。生徒に対する見方といっても、それは先生によって生徒によってちがうではないかという人もいるであろう。それもその通りだが、私がここで言っているのは、先生や生徒によってちがわない生徒に対する見方である。というと何だろうと考えるかも知れないし、一寸よくわかりにくいかも知れない。それはどんな先生も必ず学期末、学年末に生徒を一定の見方で見ているあれ、例の成績票づくりのことである。

これはどんな先生も必ずやっている。その意味であらゆる先生が生徒に対して、共通の目で対しているのである。生徒はすべての先生の前に、そういう目で見られるものとして置かれているのである。学期末になると先生には、生徒の顔が点数に見えるのではないだろうか。生徒もいい面の皮だが、先生も、生徒という人間を、数字として見るというのは、いかにも気の毒である。教育は人格との総合だということを深く信じている先生にとっては、さぞかし断腸の思いであろうと思われる。その辺は生徒の方は割切っていて、あれは点数をつける機械さなどとうそぶいているのである。しかし先生の方はそうはいかない。どうしても生徒に点数をつける気にならないで、学期末には気が狂いそうになるという先生がいる。百日の説法屁一つというが、点をつけることで何か一切を失ったような気がするというのである。

多くの先生がそうであろうが、ただあきらめてやっている中に、だんだんそういう人間的、教育的感情に不感症になって来るのではないか。点をつけることは、人間を育てることと一体どんな関係があるのだろうか。とくに通信簿につけて持たせてやると、親が５が多いとか少ないとかといって一喜一憂し、２や３があると子供が馬鹿あつかいにされるのかと思うとやり切れまい。それもなれて来ると恐ろしいもので、お宅のお子さんは出来がわるいなどと平然と言えるようになる。もっと勉強させて下さいなどと言えるようになる。これは恐ろしいことである。評価などというもっともらしい言葉を使っているが、いわば生徒の品評会などをやっているのである。それも生徒を見ているのではない。点をつけて、それ

を合計して、また割って平均を出して、これは一体何をしていることなのだろうか。人間がどういうことが出来るかがそれでわかるだろうか。

●

今ここにあらゆる種類のプログラムがあって、つまりすべての教科のすべての部分に、プログラムがあって、それがきちんと棚に整理されているとする。先生がこれを使って教育出来るようになっていれば、どうであろうか。先生はいろいろのプログラムを生徒にやらせて、その様子をじっと見ている。一人一人について、どのプログラムはどんな風に通過したか、国語のプログラムは早いが、数学はおそい、音楽はどう、体育はどう、どこをどう間違っているかなどをしらべながら、育てて行く。

プログラムはピアノのバイエルのようなものだから、今どこをやっているかを明らかにしておけば、別に点をつけることは必要ない。先生が、生徒に次々とプログラムを与えるためには生徒の通過の状況をよく見ていなくてはならぬ。次の段階にうつってよいと思えば次へ進ませる。まだ早いと思えば、こちらの練習用のプログラムをやってみろというように、時々刻々判定しながら生徒をのばしてやる。プログラムをどんどん通過出来る生徒は先へどんどん進めればよい。

別にクラスが一緒でなければ次へ進めないと考える必要はない。プログラムを次々へと進めるには、先生は時々はテストをするであろう。それは文字通りためしてみるのである。別に点をつけるためではない。ましてその点で、競争させて、あれよりおれの方がよいなどと言わせるためでない。大体そんなことは意味をなさない。それぞれの個性において、さまざまな能力をそれぞれのペースでのばしてゆけばよいのである。

こういう状況になったら、先生の生徒に対する見方がちがうであろう。先生は、本当に生徒の人間を見るようになる。一人一人の人柄を見て教育するようになるであろう。点数というもので生徒に序列をつけることが、恐ろしい人間冒瀆だと思うようになるだろう。

人間に点をつけているわけではないのだが、実際は学校生活では、その点で動かされている。あらゆる生徒はそれで劣等感をもたせられている。否、人間がそういう点をつけられて、それで人生がきまって行くというセンスをもたされる。中学校、高等学校などはひどいものである。点数万能である。大学などになれば、この点数万能が極端にあらわれる。何百人の生徒に先生は講義している。生徒はそれでも半分位しか講義に出席しない。そして単位をもらえばよい。つまり点数である。それで教育をうけたことになる。どこに人間的ふれあいがあるのか。

点とは何であろうか。単位とは何であろうか。卒業証書は何を意味するのか。それでも世の中の人は「教育」をうけることをねがっている。そしてそれが人々の一生を支配するのである。教育のつくっている罪は大きい。しかし教育はそういうばかばかしいものだと、ちゃんとわかっておればよいが、不思議に、それは人間をつくる大切なものだと錯覚されている。その美名の下に大それたことをしているのだ。それを改めるには、今の所プログラム方式を進めて、突破口をつくる以外にはなさそうである。

●

私はプログラム方式を、現代語での考え方で教育の能率をあげる方法だというようには考えていない。教育の能率などというものはそう簡単にあがりはしないのだ。問題は、うわっつらの教育方法を工夫することでなく、人間の見方をかえることだと思う。それがかわらなければ本当の教育などというものは出来はしないのだ。教育の能率をあげるとは、本物の教育をするということである。今われわれのもっているものからうそをなくすことである。うその教育で、能率をあげようとすればする程おかしくなっている。

青少年非行などということも、うその教育のあらわれだと思う。非行少年は環境がわるいからだなどというが、環境は教育するのである。環境をつくりあげているのは社会である。わるい環境を改めるこ

とが出来ないのは、社会の力ではないか。社会にその環境の教育力を認めて、その環境をつくろうとする意欲がないからではないか。教育は大切だと口で言いながら、環境という大層な教育力をもったものを、正しくつくりあげようとする努力がないのは、教育大切論が目さきだけであるのか、或は環境の教育力がわからないからであるのかどちらかであろう。

環境が大切だというのはプログラム方式の言い方をすれば、毎日毎日のドゥーイングが人間を育てるということで、きわめてあたり前のことである。ドゥーイングが人間をつくるのである。大脳細砲の働き方のくせをつくる。習慣をつくる。物の考え方をつくるのである。学校で一回や二回話をきいたことが人間をつくるのではない。少くとも今の学校教育方式では人間をつくることは出来ない。

こころみに道徳教育の問題をとりあげてみよう。今度の東京国際スポーツ大会で、毎日毎日スタンドが紙くずで散らかされて、恥ずかしい思いをした。子どもづれのお母さんやお父さんが落第だったということである。こうして子供は、公共の場、社会という場で、両親と共にそういう場をよごすドゥーイングをしているのである。自分の都合で新聞を敷いてすわり、弁当をたべたら、あとはそこへ投げておけばよいのである。自分が弁当さえたべればよいのである。こうして自分のことだけを考えて、行動するように、毎日両親と一緒に訓練されているのである。おそらく、スポーツを見に来たときだけではあるまい。あらゆることにこういう行動をしているのであろう。

こういう両親が、学校の先生に対して、この頃学校では道徳教育をしているのか、などと聞くのである。まことにこっけいである。学校では最善をつくしているといってもよいかも知れない。道徳の特設時間までもうけて、いろいろお説教しているのである。しかしいかにせん、毎日のドゥーイングは強い。それがぶちこわしである。私は先生方に、こういう事態をよく認識して、今の教育体制を根本的に改造してほしいと思う。

道徳教育のプログラムをつくってほしい。こういうと特設時間のプログラム・シートをつくることかと思う先生がいるかも知れない。それは、プログラム方式を、今の誤った教育のわくの中で考えているのである。毎日のドゥーイングのプログラムを提示してもらいたいということである。道徳とは結局社会の中での振舞の仕方である。それを毎日ドゥーイングして行かなければ、そういう正しい行動が出来るようにならない。それを特設時間に、正しいことをすることだとか、親切にすることだとかいって教えることは何にもならないのである。何故なら、正しいといっても、その人間がその時正しいと思ってやるのであるが、そういうことになると自分の注意で正しいか正しくないかをきめてやっていることになる。何が親切かは、自分の都合できめる結果になる。自分が親切と思えばやるであろうが、思わなければやらない。そうだから、今の日本では紙くずをすてるなどということは、正しくないとは誰も思わない。むしろ自分のつかったものを捨てるのは正しいと思ってやっているのである。

正しい行動とは、その場面場面できまるのである。それを場面場面でドゥーイングすることによって教育されなければ、それが出来るようにはならないのである。特設時間はその点では、靴の底から足をかいているようなものである。だから、あらゆる生活の場でのドゥーイングをはっきりきめて、それをプログラムとして、生徒にも、両親にも、社会の人にも流してもらいたい。社会中がそれによって行動する所に、本当の行動がきまるであろう。私は、それは極めて、具体的なことでよいと思う。誰もが認める行動の仕方が、無限にあるといってもよいと思う。あまりむつかしい議論のたねになることはあとのステップにしたらよい。

●

そういう行動の積みあげが、人間に何をつくっているかを、一度よく考えてみようではないか。毎日毎日のドゥーイングで、道路に紙くずを捨てないという習慣が出来た子供は、それに自信をもち、人が

それをおかすのをみたら、憤りを感ずるであろう。そうして、それがやがて社会を憂うることに発展するであろう。日本人はどうしてこうなのだというようになるであろう。それは社会を愛する心をもつことである。人は自分のつくったものには愛着を感ずる。長年使ったものに愛着を感ずる。子供の頃から育てられた行動、その行動によって社会をつくりあげて来たという感情はその社会を愛する感情であろう。愛国心などとやかましく論議されるが、実はこうして育って来るのであろう。一つ一つ積み上げられたドゥーイングによって育つのである。これはまさにプログラムの考え方なのである。

こういう本物の考え方をしなければ、道徳などというものは育って行きはしない。手軽に道徳教育は出来ないのである。日本が先進国になるためには、日本人が､そういった点にも本格的な考え方をして、人間をつくることを考えなければいけないのではないか。何事も間に合わせで、恰好だけをつけて、大国民だなどとは言えないであろう。

●

このようなことを言ったので、私がプログラム方式について、とんでもないことを考えていると思われる人がいるかも知れない。拡大解釈だなどという人もいるかも知れない。しかし私は、そういうものの考え方がプログラム方式を生み出したのであって、根本的な考え方はそうだと思っている。

プログラム方式は、テストや入学試験にうまくパスするための方式ではない。てっとりばやく何かを暗記させる方式でもない。本物の人間を育て、本当の人を育てる営みを、われわれが自覚し、自信をもって、教育の仕事の中に生きることが出来るために考えたものである。少なくとも私はそうである。これが日本のプログラム方式だと私は思っている。まねごとでないプログラム方式だと思っているのである。